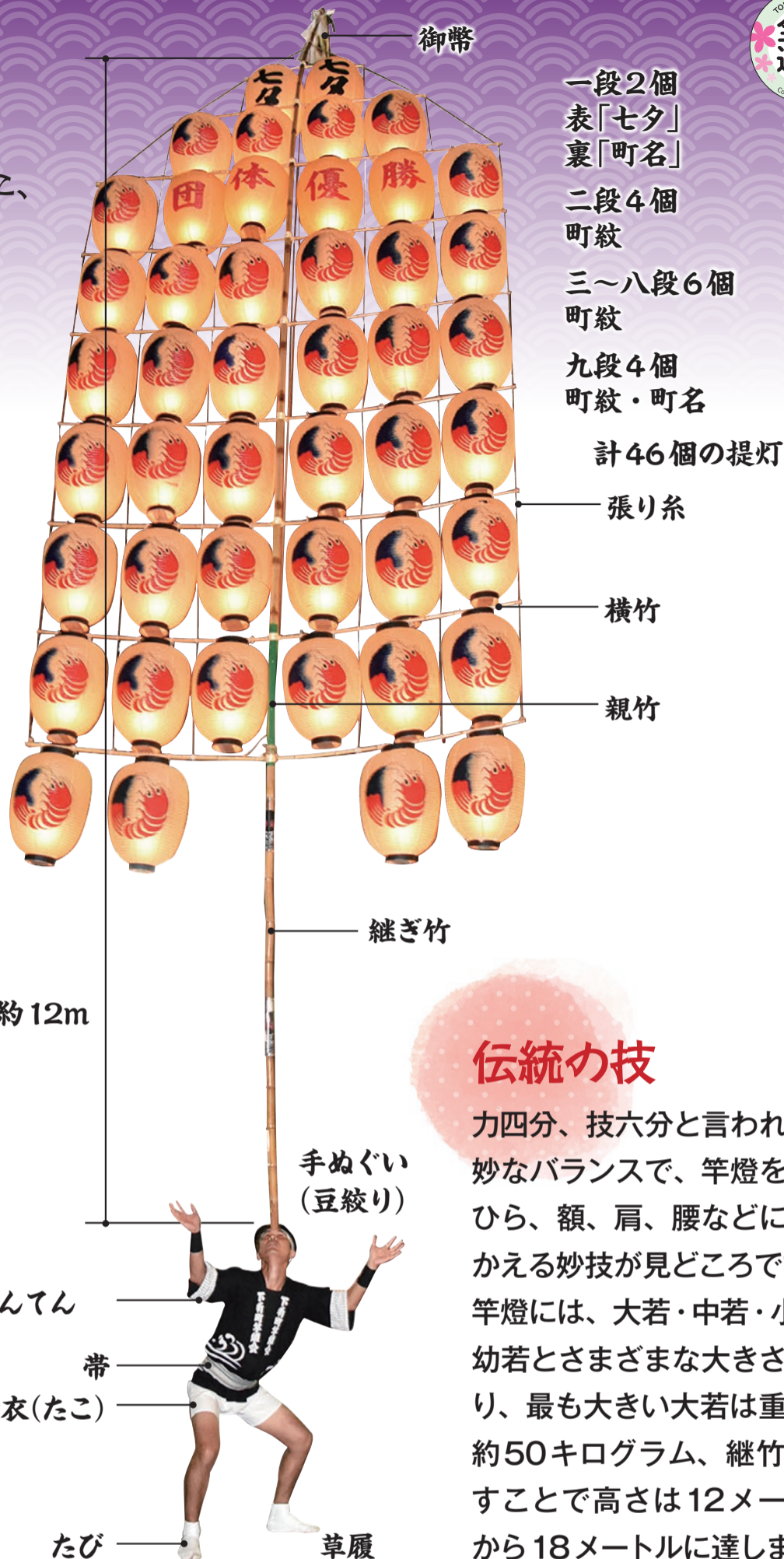


# 秋田竿燈まつり

「ドッコイショー、ドッコイショ」のかけ声とともに、絶妙なバランスで、竿燈を手のひら、額などに移しかえる妙技が見どころです。



## 竿燈まつりについて

真夏の病魔や邪気を払う、ねぶり流し行事として宝暦年間にはその原型となるものができていたといえます。

現在残っているもっとも古い文献は、寛政元年(1789年)津村淙庵の紀行文「雪の降る道」で、陰暦の7月6日に行われたねぶり流しが紹介されています。このときにはすでに秋田独自の風俗として伝えられており、長い竿を十文字に構え、それに灯火を数多く付けて、太鼓を打ちながら町を練り歩き、その灯火は二丁、三丁にも及ぶ、といった竿燈の原型が記されています。

## 伝統の技

力四分、技六分と言われる絶妙なバランスで、竿燈を手のひら、額、肩、腰などに移しかえる妙技が見どころです。竿燈には、大若・中若・小若・幼若とさまざまな大きさがあり、最も大きい大若は重さが約50キログラム、継竹を足すことで高さは12メートルから18メートルに達します。

## 竿燈 妙技



技① 流し



技② 平手



技③ 額



技④ 肩



技⑤ 腰

詳しくは「秋田竿燈まつり」ホームページをご覧ください。

